Osaka Shoin Women's University Repository

「舞姫」における漢字の読み方に関する諸問題

檀原　みすず

一

森鷗外の「舞姫」が、最初に「国民之友」（明23・1）に発表された時、振り仮名が付いた漢字はわずか三箇所（合歓・襁褓・瞳子）であり、他の漢字には読み方が示されていなかった。それ以後、「舞姫」の収録された「国民小説」（明23・10）、「美奈和集」（明25・7）、「改訂水沫集」（明39・5）、「塵泥」（大4・12）、「縮刷水沫集」（大5・8）などの諸本文では、振り仮名はいっさい振られていない。鷗外自身は「舞姫」の読み方を読者に任せていたのかも知れないが、現在、一般に通用している振り仮名の中には、原意に沿い難い恣意的な読み方がかなり流布しているように思われる。

鷗外の没後、「舞姫」本文にルビが振られたのは、昭和二年八月鷗外全集刊行会発行『鷗外全集』第五巻[注1]が最初であった。これはパラルビであって、その普及版の昭和四年六月同刊行会発行『鷗外全集』第五巻ではルビ付きが多少増えたようであるが、「舞姫」の漢字に適当なルビが振られているかどうかは検討の余地があるように思われる。例えば、「翳」を〈かさし〉と読み、「法典を暗じて」を〈あんじて〉、「雪に汙れ」を〈けがれ〉などのように読んでいるが、これでは意味が不明瞭になってしまう。また、「妍き」を〈かほよき〉と読む根拠はどこにあるのだろうか。〈みめよき〉という読み方も考えられはしないだろうか。

改造社発行『現代日本文学全集』第三篇「森鷗外集」（昭3・1）は、「舞姫」の読み方が総ルビで表わされたので、読者が読み易く便利になった。これを読む読者層は、鷗外全集刊行会版の方と比べて一般大衆が主であったと思われるが、一般大衆向けの「舞姫」の読み方がここに定着したと言えるだろう。これは、当時のほぼ基準的な漢字の読み方として見ることも出来るが、鷗外の意図を

Osaka Shoin Women's University Repository

付度した読み方にはなっていないようである。例えば、「頭」を〈かしら〉と読み、「縦令」を〈よしや〉、「葬」を〈はふり〉と読んでいるが、「舞姫」の草稿や「国民之友」、「国民小説」などを参照すると、これらの漢字には「頭べ」・「縦令ひ」・「葬ひ」という送り仮名が送られているので〈かうべ〉・〈たとひ〉・〈とぶ（む）らひ〉と読むほうが原意に近いのではないだろうか。また、「概略」を〈がいりゃく〉、「物触れば」を〈さやれば〉などと読んでいるが、これらも初出系の「舞姫」の諸本では、「あらまし」・「物ふるれば」と平仮名で表記されているので読み方の見当がつくだろう。もっとも、初出系の諸本と改訂本とでは鷗外が意識的に本文を変えているので、読み方も変わると言えなくもないのだが。

鷗外全集刊行会普及版『鷗外全集』〔以下（刊）と略記〕と改造社版「森鷗外集」〔以下（改）と略記〕とにおける「舞姫」を比較してみると、漢字の読み方に異なる例が多々みられる。「鈴索」〈れいさく〉（刊）・〈すずなは〉（改）、「縦令」〈たとへ〉（刊）・〈よしや〉（改）、「悪阻」〈をそ〉（刊）・〈つはり〉（改）、「午餐」〈ごさん〉（刊）・〈ひるげ〉（改）、「榻」〈たふ〉（刊）・〈こしかけ〉（改）、「慇」〈ねんごろ〉（刊）・〈ねもごろ〉（改）、「欷歔」〈すすりなき〉（刊）・〈ききょ〉（改）、「佛得力」〈フリイドリヒ〉（刊）・〈フレデリック〉（改）、「普魯西」〈プロイセン〉（刊）・〈プロシヤ〉（改）、などは一部の例であるが、この二者についての振り仮名の傾向を見ると、鷗外全集刊行会版『鷗外全集』は音よみのものが多く、改造社版「森鷗外集」の方は全般に訓よみの傾向が強いようである。「舞姫」にルビが振られた初期において、このような二種類の異なった読み方が提出されたが、この二者の「舞姫」の読み方が果して鷗外の意図したような読み方であったかどうかは疑問である。これらと同時期に発行された「うたかたの記他三篇」（岩波文庫、昭2・10）や『明治大正文学全集』第七巻「森鷗外篇」（春陽堂刊、昭4・1）、「水沫集」上巻（春陽堂文庫、昭7・11）などに収録の「舞姫」は、殆ど鷗外全集刊行会版『鷗外全集』の振り仮名の影響を受けている。この時期には、鷗外全集刊行会版の影響力のほうが改造社版よりも強かったことが窺えた。

以上のような比較的初期に刊行された「舞姫」の底本は、殆どが「縮刷水沫集」であったが、昭和十一年六月岩波書店発行の『鷗外全集』（著作篇第二巻）において「塵泥」が原拠とされて以来、「塵泥」を底本にした「舞姫」が世間一般に普及した。岩波書店発行の『鷗外全集』は、第一次（昭11・6）・第二次（昭26・9）・第三次（昭46・11）とも「舞姫」本文にルビが振られていないが、このルビのない本文が流布したことで、却って「舞姫」に恣意的なルビを施した本文が読者の必要に応じて世に出回ったのではないだろうか。次に、ルビが振られた「舞姫」収録の諸本で、主なものを列挙してみよう。(注2)

A「森鷗外集」（『現代日本文学全集』第七巻）昭和二八年一一月筑摩書房刊

B「森鷗外集」（『昭和文学全集』別二）昭和三〇年二月　角川書店刊

Osaka Shoin Women's University Repository

C「鷗外名作集」(『日本国民文学全集』二一巻) 昭和三一年七月河出書房刊
D『森鷗外小説全集』第一巻　昭和三二年二月　宝文館刊
E『森鷗外全集』第一巻　昭和三四年三月　筑摩書房刊
F「森鷗外」(『近代文学鑑賞講座』第四巻) 昭和三五年一月　角川書店刊
G「森鷗外集」(『日本現代文学全集』第七巻) 昭和三七年一月　講談社刊
H『森鷗外作品集』第一巻　昭和三八年四月　昭和出版社刊
I「森鷗外」昭和三八年一一月　桜楓社刊
J「森鷗外集」(『現代文学大系』第四巻) 昭和三九年一〇月　筑摩書房刊
K「森鷗外」(『近代文学注釈大系』) 昭和四一年一月　有精堂刊
L「森鷗外集㈠」(『現代日本文学大系』七) 昭和四四年八月　筑摩書房刊
M「明治村版　文づかひ」昭和四五年八月　明治村刊
N「森鷗外集Ⅰ」(『日本近代文学大系』第一一巻) 昭和四九年九月角川書店刊
O「森鷗外」(『鑑賞日本現代文学』第一巻) 昭和五六年八月　角川書店刊

以上、一般に流布している本文には、依拠した底本さえ明記していないものが大部分である。ましてや、ルビの振り方についての校訂方針を明細に記したものはほとんどみられないので、ルビは原文のままなのか、あるいは校訂者の任意によるものなのか曖昧にされている。読者に本文を提供する場合、依拠した底本や、ルビは原文のルビか否かを読者に対して示すくらいの配慮が必要なのではないだろうか。そこで、それぞれ「舞姫」に振られたルビを調べてみると、大半が改造社版「森鷗外集」(昭3・1) の振り仮名の影響を受けていることがわかった。鷗外全集刊行会版『鷗外全集』(昭4・6) の「舞姫」の読み方はほとんど問題にされなかったようである。

前掲、諸文献の中でA『現代日本文学全集』第七巻「森鷗外集」(筑摩書房刊、昭28・11) は、改造社版「森鷗外集」のルビを基礎にして、「舞姫」の後半部 (「明治廿一年の冬は来にけり」以降) が一部分、任意な読み方に変っている。「階」〈きざはし〉・「稜角」〈かど〉・「梯」〈きざはし〉・「頭」〈かうべ〉・「庖厨」〈くりや〉・「痴」〈おろか〉などは読み方の新しくなった漢字である。だいたい訓よみ (和語) への変更が多く、「舞姫」の文章は和文調に向っているようだ。本文の後半部が前半部に対して漢字の読み方の傾向が変ったということは、前半部と後半部との校訂者が違うのではないかという可能性も、あるいは考えられる。いずれにせよ、ルビは恣意的に振られたようである。文献BCDFGHJは、この『現代日本文学全集』第七巻「森鷗外集」のルビを踏襲したと思われるふしが、その特殊な読み方の例から窺えた。(注3)

文献E　筑摩書房発行『森鷗外全集』第一巻 (昭34・3) は、総ルビではないにしろ改造社版「森鷗外集」の読み方そのままが定着している。もっとも、「窖」〈あなぐら〉・「階」〈はしご〉などの例は「舞姫」の底本の違いによる読み方で、改造社版では「穴居」〈けっきょ〉・「梯」〈はしご〉になっていた。この筑摩書房版『森鷗外全集』は、須藤松雄氏による「語注」が付いた最初のもので、一応学問的な姿勢に立っているが、漢字の読み方に関しては徹底的な検討がなされていないようで、改造社版「森鷗外集」と同じく疑問のある読み方が多い。「舞姫」におけるそのような疑問のあ

Osaka Shoin Women's University Repository

る漢字の読み方は一般に普及しており、文献Lのほかに文庫本（角川文庫「舞姫・うたかたの記」昭29・6、旺文社文庫「舞姫・山椒大夫他四編」昭41・11、新潮文庫「阿部一族・舞姫」昭43・4、学燈文庫「森鷗外」刊行年月不詳、岩波文庫「舞姫・うたかたの記他三篇」昭56・1）などに影響を与え、テキスト類（注4）（「現代国語3改訂版」筑摩書房刊　昭43・11、「近代文学選」桜楓社刊　昭43・5、「新版現代国語3」三省堂刊　昭50・3）にまで及んでいる。

文献I　重松泰雄氏編著「森鷗外」（桜楓社刊、昭38・11）に収録の「舞姫」は、底本が「国民之友」で、漢字の振り仮名に根拠が示された最初のものと思われる。「舞姫」の初出の送り仮名や、鷗外の他の作品（「即興詩人」「うたかたの記」「妄想」など）の振り仮名から用例が参照され、「舞姫」の漢字の読み方に学問的な基礎が置かれている。ただし、ルビは原則的に再出の漢字には振られていないようであるし、それを同じ読み方に統一すべきなのかどうかも示されていないので、再出漢字の読み方が不明瞭になっている。なお、「舞姫」より刊行期のはるかに遅い、まして口語文の「妄想」（明44）からルビの用例を引用したのは行き過ぎの難があろう。ともあれ、この「舞姫」における漢字の読み方には尊重すべき例がたくさんある。主だったものに、「妍き」＜みめよき＞・「噴井」＜ふんせい＞・「木欄」＜てすり＞・「羞を帯びて」＜しう＞・「忙はしげ」＜せ＞・「族」＜うから＞・「重霧」＜ちょうむ＞などの例が挙げられるがこの文献は主に大学生の自習参考書として編纂され一般の研究者の目にふれることが少なかったためであろうか、他本への影響は少なかったようである。

文献K　「近代文学注釈大系　森鷗外」（有精堂刊、昭41・1）は、「校訂・注釈・解説」が三好行雄氏によるもので、「はしがき」に記されたように注解の方面で、筑摩書房版『森鷗外全集』の影響を受けている。けれども「舞姫」のルビに関しては、この筑摩書房版『森鷗外全集』からの影響は見られない。もっぱら文献Aにおける「舞姫」のルビを参照したのではないかと思われる節があるが、「鈴索」＜れいさく＞だけはその例に従わない読み方に変っている。いずれにしろ「舞姫」の読み方の根拠は示されなかった。

文献N　『日本近代文学大系』第一一巻「森鷗外集I」（角川書店刊、昭49・9）は、同じく三好行雄氏の注釈だが、前の注釈書Kを大幅に改訂したもののようである。「舞姫」のルビは半数以上削減され、初出「国民之友」に振られた「合歓」＜ねむ＞・「襁褓」＜むつき＞・「瞳子」＜ひとみ＞などの原ルビまで省略された。原ルビは鷗外自身が振ったと思われる唯一根拠のあるルビなのだが。それでも、「噴井」＜ふんせい＞・「土瀝青」＜アスファルト＞の二例にはほぼ同時期の鷗外の作品（「即興詩人」・「衛生学大意」）から読み方の原拠が注記された。全てのルビはマルガッコ（　）に入れられ、問題のある漢字からはルビが除かれてしまった。ルビが削除された漢字はどのように読まなければならなかったのだろうか。

文献M　「明治村版文づかひ」（明治村刊、昭45・8）は、鷗外のドイツ小説三部作が単行本の形に収められたもので、野田宇太郎氏による校訂・意匠・製作であって、これらの面での配慮が行き届

Osaka Shoin Women's University Repository

いている。あとがきには、「舞姫」の振り仮名について、「間違ひなくさうとしか読めない文字で、現代では正しく讀（ママ）むことがむづかしいと思はれるものだけに振り仮名をつけ、それでも読めぬ場合は読者各自に辞書を使ってもらうことにした」と記され、「鷗外文学を正しく読む」ことを勧めている。野田氏の振り仮名で従来の読み方とは異なる例が、「妍き」〈うつくしき〉・「媒」〈もと〉・「裏」〈しなやか〉・「訪らはず」〈とむ〉・「落居たり」〈おちつき〉・「髪は蓬ろと亂れて」〈おぼろ〉などに見られ、読み方が工夫された。ただし、「妍き」の例は初出の「舞姫」で「妍よき」と送り仮名が送られていたので「うつくしき」という読み方は出来ない。

「舞姫」の索引として菊田紀郎氏編「(一)本文・漢字索引」（「国語語彙史の研究一」和泉書院刊、昭55・5）及び「(二)語彙索引」（「国語語彙史の研究二」和泉書院刊、昭56・5）が作成された。「国民之友」所載の「舞姫」を底本にしている。「語彙索引」は自立語を対象に五十音順の配列に従っているが、読み方に疑問のある語が恣意的に分類されたようだ。例えば、〈おばしま〉「木欄」・〈かん〉「間」・〈きう〉「舊」・〈ころも〉「衣」・〈ささゆ〉「支ゆ」・〈しぞく〉「親族」・〈すずなは〉「鈴索」・〈チャン〉「土瀝青」・〈なかぞら〉「半天」・〈はしご〉「梯」・〈ぶれい〉「無禮」・〈やから〉「族」・〈わかれ〉「辭別」・〈わざ〉「業」などは読み方が二とおり以上ある語で、必ずしも適切な読み方によって分類されていないものもある。また、使用頻度の高い語を全て同じ読み方にしてよいかどうか問題であるし、同音異字と思われる語〈ひとすぢ〉「一筋」・（一条）、〈ひらく〉「開く」・（披く）、〈ふみ〉「文」・（書）をそれぞれ一例にまとめた分類のしかたにも不備が残っている。「舞姫」の漢字の読み方は確定していないのであるから、語彙索引の作成には無理がある。もっとも、漢字のよみ方の典拠（どの文献によって振り仮名を参照したのか）を示すとか、さもなくば全て音よみに徹底するとかなら、まだしも索引を作る意義はあるだろう。

文献O　磯貝英夫氏編『鑑賞日本現代文学』第一巻「森鷗外」（角川書店、昭56・8）は作品鑑賞を中心に本文の注釈や振り仮名にも多くの試みがなされた。「舞姫」の振り仮名については「気づくかぎり、周辺の諸資料を参照して、かなをふった」と記されたように、典拠のある振り仮名が適宜に振られている。「噴井」〈ふんせい〉・「鈴索」〈すずなわ〉・「棒」〈キュウ〉・「木欄」〈てすり〉・「親族」〈みうち〉・「成心」〈まえぎめ〉・「門者」〈かどもり〉・「族」〈うから〉などの例は、「即興詩人」やその他「舞姫」と同時期の作品に振られていたルビを当てているようである。しかし、「舞姫」と同時期の鷗外の作品から漢字の読み方の例が見つかったとしても、必ずしもその読み方が「舞姫」に適用出来るとは限らないようだ。なお、ここでは振り仮名が全て現代かなづかいになっているが、文語体の文章に現代かなづかいによる振り仮名をふることは果して適当であるのだろうか。

Osaka Shoin Women's University Repository

二

前章において、従来の「舞姫」の漢字のよみ方について検討したところ、殆どの文献は改造社版「森鷗外集」の振り仮名を準拠とし、校訂者の任意な読み方による例が甚だ多かった。その結果、「舞姫」の漢字の読み方は多様化し、振り仮名の異なる幾種類もの本文が出来てしまった。最近になって漸く「舞姫」の読み方が学問的に試みられ始めたが、未だ徹底した調査には及んでいないようである。そこで、出来るだけ鷗外の意図を忖度して「舞姫」の漢字の読み方を試みたいと思う。ここでは、「舞姫」の漢字の読み方を判定するのに必要と思われる諸基準に従って、読み方を検討してみたい。

まず、草稿その他の諸本から、送り仮名および漢字と仮名などの改変を参照する必要があるだろう。「舞姫」はその収録の諸本によって異同が著しく、送り仮名が現行と相違するため、その多くは省略されているので、誤読の恐れのある漢字がある。送り仮名は初出に近くなるほど送られていたので、この送り仮名によって読み方の見当を付けることが出来る。「縮刷水沫集」を底本[注5]として送り仮名の異同の例を挙げてみよう。

分節番号[注6] ②「望」＜望み＞（草・国友）②「新からぬ」＜新しからぬ＞（草・国友・国小）④「頭」＜頭べ＞（草・国友・国小）④「恨」＜恨み＞（草・国友・国小）⑥「妍き」＜妍よき＞（草・国友・国小）⑩「時來れば」＜時來たれば＞（草・国友・国小）⑩「母の教」＜母の教へ＞（草・国友・国小）⑬「學の道」＜學びの道＞（草）⑬「仕の道」＜仕への道＞（草・国友）⑱㉙㊸「面」＜面て＞（草・国友）㉓「葬」＜葬ひ＞（草・国友）㉓㊻「座頭」＜座頭ら＞（草・国友）㉓㊶㊿「縱令」＜縱令ひ＞（草・国友・国小）㉘「奈何ぞや」＜奈何にぞや＞（草・国友・国小）㊸「膚粟立つ」＜膚へ粟立つ＞（草）㊸「緊く」＜緊しく＞（草・国友・国小・塵）㊺「命」＜命せ＞（草・国友）㊻「僞なき」＜僞りなき＞（草・国友・国小・美・改水・塵）㊽「彫鏤の工」＜彫鏤の工み＞（草・国友）㊾「直に寢ねつ」＜直ちに寢ねつ＞（草・国友・国小・美・改水・塵）㊿「世渡」＜世渡り＞（草・国友・国小）㊿「迷」＜迷ひ＞（草・国友・国小）54「習」＜習ひ＞（草・国友・国小）65「慇に」＜慇ろに＞（草・国友・国小）66「俄に」＜俄かに＞（草・国友・国小）66「遽に」＜遽かに＞（草・国友・国小）68「途に上り」＜途に上ぼり＞（草・国友・国小）

また、「舞姫」の諸本を比較すると本文によって漢字が仮名に変えられた例や仮名が漢字に変えられた例があり、これらから漢字の読み方は判定できると思われる。例えば、

分節番号 ④「概略」＜あらまし＞（国友・国小）⑦「何事」＜何ごと＞（草・国友・国小）⑨「此か彼か」＜これかかれか＞（草・国友・国小）⑬「物觸れば」＜物ふれば＞（草・国友・国

Osaka Shoin Women's University Repository

少）⑬「頑固なる」＜かたくななる＞（塵）⑱「少女」＜をと女＞（草）㉘「果なき」＜はかなき＞（塵）㉙「美しき」＜うつくしき＞（塵）㊻「太く」＜いたく＞（国友・国小・美・改水・塵）㊿「怎なる」＜いかなる＞（草・国友・国小）(50)「還り玉はん」＜かへり玉はん＞（塵）

以上、「舞姫」の改訂諸本を比較することで、従来読み誤まっていた漢字もおよそ正確に読めるのではないだろうか。中には、②「尋常」＜世の常[注7]＞（草・国友・国小）④「房」＜カビン＞（草・国友・国小）㉜「報酬」＜酬ひ＞（草・国友）という変更の例もあり、これらを初出系どおりに読むことも考えられる。しかし、鷗外は改稿と同時に読み方まで変えようとしたのではないかという疑問が残らないではない。

次に、鷗外自身の振り仮名と思われるもので、「舞姫」と同時期の作品から漢字の読み方を参照する必要があるだろう。主に「舞姫」の文体と似通った作品について鷗外の振り仮名の傾向を調べると、特殊な漢字であっても音読みしている場合が少なくない。「うたかたの記」「文づかひ」「即興詩人[注8]」など一部の作品ではあるが、振り仮名の付け方に原則的な傾向はみられなかった。その中から「舞姫」に適用出来そうに思われる漢字の読み方や、これら三作品以外の作品からも例を挙げてみよう。

分節番号　①「卓」＜つくゑ＞小卓（文）・贅卓（即）・骨牌卓（文）・高卓（即）・卓越し（空）①「骨牌」＜カルタ＞（即）・＜かるた＞（即・空）②「尋常」＜よのつね＞（即・文）④「概略」＜あらまし＞（即）⑤「首」＜はじめ＞（即）⑥「土瀝青」＜アスファルト＞（衛生学大意[注9]）⑥「噴井」＜ふんせゐ＞（即）⑦「鈴索」＜すずなは＞（理木）⑫「一群」＜ひとむれ＞（文・空）・＜ひとむら＞（即）⑬「一條」＜ひとすぢ＞（即）⑯㉘「交際」＜つきあひ＞（文）⑰「燈火」＜ともしび＞（即）⑰「巷」＜こうぢ＞（即）⑰「木欄」＜「欄」てすり＞（即）⑰「栖家」＜すみか＞（即）⑱「睫毛」＜まつげ＞（即）⑳㊼「欷歔」＜ききょ＞（即）㉑㉒㉓「老媼」＜おうな＞（即）㉑「額に印せし」＜おせし＞（即）㉒「無禮の振舞」＜なめ＞（即・文）㉒「右手」＜めて＞（文・空）㉒「竈」＜へつひ＞（空）㉒「白布」＜しらぬの＞（空）㉒「臥床」＜ふしど＞（即）㉒「氈」＜かも＞（即）㉓「乳の如き色の顔」＜ち＞（文）㉗「親族」＜みうち[注10]＞（即）㉜㊴「午餐」＜ひるげ＞（即）㉝「商人」＜あきうど＞（即）㊴「門者」＜かどもり＞（即）㊶㊷㊺「生活」＜なりはひ＞（即）㊼「影護かる」＜うしろめたかる＞（即）㊽「黄蠟」＜わうろう＞（文）㊿「族」＜うから＞（即）(50)「何處」＜いづく＞（即）(50)「苦艱」＜くげん＞（即）(52)「屋上の禽」＜やね＞（即）(57)「穉し」＜おさなし＞（即）・＜いとけなし＞（文）(59)「獸苑の傍」＜かたへ＞（即）(59)「路の邊」＜ほとり＞（即）(59)「榻」＜こしかけ＞（即）(60)「瓦斯燈」＜がすとう＞（文）(65)「顚末」＜もとすゑ＞（即）(67)(68)「全く」＜またく＞（即）(68)「千行」＜ちすぢ＞（即）

以上、鷗外自身の振り仮名に原則的な傾向が認められないので、

Osaka Shoin Women's University Repository

他の作品から同例の漢字が見つかったとしても、必ずしもその読み方が「舞姫」に適用できるとは限らない。しかし鷗外の漢字の読ませ方として参照すべきものと思われる。

「舞姫」の発表直後、忍月と鷗外との間で応酬されたいわゆる舞姫論争の文中からも、「舞姫」の漢字の読み方は僅かながら窺うことが出来る。気取半之丞（忍月）の「舞姫三評」（「江湖新聞」第69号、明23・5・4）には、「鈴索」＜れいさく＞・「卓」＜つくゑ＞などの例が示されている。これらの読み方は鷗外自身の振り仮名ではないにしろ、忍月もしくは当時の読者の代表的な読み方として参照することが出来るだろう。

ところで、「舞姫」の文体は和漢洋の折衷文体であるので、読み方に問題のある漢字に、和語・漢語・洋語の判定をする必要があるだろう。前後の文章が漢文調であるかあるいは和文調であるかによって、音よみ（漢語）・訓よみ（和語）いずれか適応した読み方をしなければならない。しかしどこまで雅語や俚語に訓読みが必要であるかは決め難い。多分に主観が働くことはまぬがれないだろうが、ともあれ、それぞれに読み方を試みてみたい。

1　和語（訓よみ）の例

（　）内は別の読み方も可能な例

分節番号　⑰「樓上の木欄に干したる敷布」＜おばしま＞（てすり）⑰「一つの梯は直ちに樓に達し」＜きざはし＞（はしご）⑰「穴居の鍛冶が栖家」＜あなゐ＞（けっきょ）㊱「もの食ふごとに吐くを、悪阻といふものならん」＜つはり＞（をそ）㊳「エリスに接吻して樓を下りつ」＜たかどの＞（ろう）㊴「廊をつたひて室の前まで往きし」＜わたどの＞（ろう）㊺「心虚なりしを掩ひ隠し」＜うつろ＞（きょ）㊻「魯西亞より歸り來んまでの費をば掩ひつべし」＜つひえ＞（ひ）㊼「余は旅裝整へて」＜たびじたく＞（りょそう）㊾「かゝる思ひをば、生計に苦みて、けふの日の食なかりし折にもせざりき」＜たつき＞（くらし）（せいけい）㊿「君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる」＜そこひ＞（そこ）

以上のほかに特殊なよみ方が可能と思われる漢字に⑥「半天」＜なかぞら＞・㉘「紅粉」＜べにおしろひ＞・㉙「愛する情」＜こころ＞・㊳「接吻」＜くちづけ＞・㊽「心頭」＜むね＞・㊸㊻「面色」＜かほいろ＞・㊽「屍」＜しかばね＞・㊽「資本」＜もとで＞などを挙げることが出来る。これらは漢字の意味を示した読み方である。このような特殊な読み方が可能な漢字は少なくないが、振り仮名をふる場合、どの程度まで漢字の意味を示すべきかが問題であろう。

2　漢語（音よみ）の例

（　）内は別の読み方も可能な例

分節番号　⑥「大道髪の如きウンテル、デン、リンデン」＜だいどうはつ＞（だいどうかみ）⑦「余が鈴索を引き鳴らして謁を通じ」＜れいさく＞（すずなは）⑪「蔗を嚼む境に入りぬ」＜きょ

Osaka Shoin Women's University Repository

う〉（さかひ）⑰「クロステル巷の古寺」〈こじ〉（ふるでら）⑰「木欄に干したる敷布、襦袢[注11]などまだ取入れぬ人家」〈じゅばん〉（はだぎ）㉒「少女は羞を帯びて立てり」〈しう〉（はぢらひ）（はぢ）㉝「小をんなが持て來し一盞の珈琲」〈いっさん〉（ひとつき）㊳「上襦袢も極めて白きを選び」〈うはじゅばん〉㊸「二重のがらす窓を緊く鎖して」〈にぢゅう〉（ふたえ）㊺「咄嗟の間」〈かん〉（あひだ）㊽「幾星の勲章、幾枝の『エポレット』」〈いくし〉（いくえ）㊹「路上の雪は稜角ある氷片となりて」〈りょうかく〉（かど）㊶「ウンテル、デン、リンデンの酒家、茶店は猶ほ人の出入盛りにて」〈さてん〉（ちゃてん）（ちゃみせ）㊼「その痴なること赤兒の如くなり」〈ち〉（おろか）㊼「襁褓一つを身につけて、幾度か出しては見、見ては欷歔す」〈ききょ〉（すすりなき）

以上、前後の文章が漢文調を帯びている場合とか、音よみの方が意味上ふさわしい場合など、この例に従った。しかし大抵は、前後の調子で読むという判定をせざるを得ないようだ。

3　洋語（外来語）の例

「舞姫」の文章は、洋語の表記法がそれぞれに異なっている。「ホテル」「ニル、アドミラリイ」「レエベマン」「マンサルド」「井クトリア」「マルク」「クルズス」「コルポルタアジュ」「ドロシュケ」「カイゼルホオフ」「プリュッシュ」「ゾフア」「カバン」「エポレット」=「カミン」=「レエス」など、きわめて外国的なもの、あるいは外国にしか存在しないと思われるもので日本語訳の難しいものなどは、原語のよみの片仮名書きがそのままカギカッコ「　」に入れられている。また、「縮刷水沫集」では取り除かれたが、その他の諸本では欧語の固有名詞に傍線すなわち――（人名）・═══（地名）が施されていた。よって「縮刷水沫集」では、人名（エリス、エルンスト・ワイゲルト、シャウムベルヒ、ショオペンハウエル、シルレル、ビョルネ、ハイネ、ビスマルク侯、等）や、地名（セイゴン、ブリンヂイシイ、ウンテル・デン・リンデン、ブランデンブルク、キョオニヒ街、モンビシユウ街、クロステル巷、等）は、傍線のない片仮名で表記されている。傍線が除去されたことで、洋語が意識されずに和文脈の中に溶け込んでいるようだ。ところで、以上の片仮名表記の語以外に、漢字表記の洋語がある。

「歐羅巴」〈ョオロッパ〉・「獨逸」〈ドイツ〉・「普魯西」〈プロイセン〉（プロシヤ）・「伯林」〈ベルリン〉・「魯西亞」〈ロシア〉・「巴里」〈パリ〉・「佛蘭西」〈フランス〉・「猶太」〈ユダヤ〉などは漢字表記の地名である。その中で「伯林」は「ベルリン」という片仮名表記のものもあった。

「維廉」・「佛得力」はともに漢字表記の人名だが、「舞姫」はドイツが舞台なので当然ドイツ名で読むべきところ。〈ウイルヘルム〉・〈フリイドリヒ〉でなければならないのではないだろうか。同じく地名の「普魯西」も〈プロシヤ〉より〈プロイセン〉の方がふさわしいように思われる。

また、「土瀝青」〈アスファルト〉（チヤン）・「麥酒」〈ビイル〉

Osaka Shoin Women's University Repository

・「棒」〈キュウ〉[注12]・「珈琲」〈カツフエエ〉・「油燈」〈ラムプ〉・「瓦斯燈」〈ガスとう〉などは漢字表記の外来語とみなされるが、これらの例を外来語として読むのなら、「房奴」[注13]〈ボオイ〉・「房」[注14]〈カビン〉・「手巾」〈ハンケ(カ)チ〉と読む方が良いのではないだろうか。また「卓」は〈テエブル〉、「臥床」は〈ベツド〉と読める可能性がある。もっとも、これらの例はドイツ語よみではなく一般に使用されたと思われる読み方だが。

「舞姫」文中で使用頻度の高い漢字は全て同じ読み方でよいかどうか問題である。たとえば、「衣」は〈きぬ〉とも〈ころも〉とも読める。「即興詩人」に〈きぬ〉という振り仮名の例はあるが、「舞姫」の文脈や文の調子によって「衣」の読み方を使い分ける必要があるように思われる。分節番号⑯「赤く白く面を塗りて、赫然たる色の衣を纏ひ、珈琲店に坐して客を延く女」⑱「髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず」㉑「貧苦の痕を額に印せし面の老媼にて、古き獣綿の衣を着、汚れたる上靴を穿きたり」㊱「壁の石を徹し、衣の綿を穿つ北欧羅巴の寒さ」㊳「否、かく衣を更め玉ふを見れば、何となくわが豐太郎の君とは見えず」㊸「衣は泥まじりの雪に汚れ」など文中六箇所に使用された「衣」の漢字にそれぞれ〈きぬ〉や〈ころも〉などの読み方を判定すべきだと感じた。多分に主観的な読み方にならざるを得ないが、「舞姫」の文章のニュアンスやトーンを尊重すれば、どちらか一方だけの読み方に統一することは出来ないのではないだろうか。

また「梯」という漢字の読み方についても同じことが言える。「梯」は、「舞姫」の文中で七箇所使用されているが、「梯」の設定された場所やその材質などによって読み方を推定する必要があるかもしれない。分節番号⑰「一つの梯は直ちに樓に達し、他の梯は穴居の鍛冶が栖家に通じ」㉑「寺の筋向ひなる大戸を入れば、缺け損じたる石の梯あり」㊴「久しく踏み慣れぬ大理石の梯を登り」㊹「馭丁に『カバン』持たせて梯を登らんとする程に、エリスの梯を駈け下るに逢ひぬ」㊷「身の節の痛み堪へ難ければ、這ふ如くに梯を登りつ」などのうち、㊴の例は「塵泥」本では「階」の漢字が当てられていた。「文づかひ」に「大理石の階」〈まあぶるのかい〉の用例があるので「塵泥」本では〈かい〉という読み方も考えられる。その他の諸本では「梯」の漢字になっているので〈きざはし〉という読み方が適当なのではないかと思われる。

「間」は〈あひだ〉なのか〈かん〉なのか〈ま〉なのか。文中には九箇所の例がある。分節番号②「獨逸にて物學びせし間に」⑥「許多の景物目睫の間に聚まりたれば」⑦「いづくにていつの間にかくは學び得たる」㉑「エリス歸りぬと答ふる間もなく」㉙「恍惚の間にこゝに及びしを」㉜「エリスと余とはいつの間にか」㊺「余は數日間、かの公務に違なき相澤を見ざりしかば」㊺「卒然ものを問はれたるときは、咄嗟の間、その答の範圍を善くも量らず」㊸「帽をばいつの間にか失ひ」などの読み方もやはり文脈や文の調子からの判定に拠らざるを得ないようだ。例は異なるが、「即興詩人」の振り仮名で「汗衫」の漢字に〈じゆばん〉と〈はだぎ〉との二通りの読み方の例があった。鷗外は意図的に読み方を変えていると思

Osaka Shoin Women's University Repository

われるので、「舞姫」文中の使用頻度の高い漢字も文脈や文の調子に即した読み方をすべきだと思われた。

「文」・「書」・「ふみ」の例は、意味において「文書・手紙・書物」など多様に用いられるが、「舞姫」文中では必ずしも意味によって文字の区別がなされていないようである。分節番号㊲「故郷よりのふみなりや」は「塵泥」本では「文」、㊿「また程經てのふみは」は「草稿」で「書」の文字が当てられていた。また「即興詩人」に「書」〈ふみ〉の用例もみられるので、全て仮名書きの〈ふみ〉に統一して読むことも考えられるが、別の読み方のほうが適当と思われる場合もある。分節番号㉗「母の死を報じたる書」などは意味のうえで「書状」を示すと思われるので〈ふみ〉よりも〈しよ〉という読み方のほうが適当ではないかと思われる。この例の場合、直前にある文章で「我生涯にて尤も悲痛を覺えさせたる二通の書状に接しぬ」という言葉が決め手になるだろう。

「女」という漢字は、分節番号⑯「珈琲店に坐して客を延く女」〈をみ(ん)な〉と㉓「手足の纖く裏なるは、貧家の女に似ず」〈むすめ〉とに読み方を変えるほうがそれぞれの文意に適うと思われる。これらの外にも読み方に問題のある例は少なくない。分節番号④「房奴の來て電氣線の鍵を捩るには猶程もあるべければ」の「捩る」は、「拈る」〈ひねる〉と字体が異なる。㉑「針金の先きを捩ぢ曲げたる」という「捩づ」の例が同文中にあるので、〈ひねる〉とは読み難い。〈ねづる〉の方が適当かとも思われる。また、分節番号㊸「雪に汙れ」は、同文中の⑱「衣は垢つき汚れたり」㉑「汚れたる上靴を穿きたり」㊳「少し汚れたる外套」などの「汚」の文字と別字体になっているので、「泥まみれ」「血まみれ」などの言葉と同じように〈雪にまみれ〉とよみたい。

三

調査の結果、「舞姫」における漢字の読み方は、初出や改稿本によって確定できる読み方と、鷗外の他の作品から推定する読み方と、さらに「舞姫」そのものの文体や解釈に基づいて付度する読み方との三種類に分けられた。なかでも最後の例はどうしても主観的にならざるを得ない。

ところで、「舞姫」の原稿が鷗外の弟森篤次郎（三木竹二）によって朗読されたという記録が、小金井喜美子の「森於菟に」（「文学」、昭和11・6）の中に見られる。

年の暮近く私が千住の家へ行つて居ます時、叔父さんが車で上野の家からかけつけて、私の居るのを見て「來て居たのか丁度よかつた」、「何かあつたのですか。」心配さうな顔を見て笑ひながら「何、あの舞姫の事を今度兄さんがお書きになつたから、まつ先に皆に聞せて呉れといふお使ひに來たのですよ、お父さんは往診の御留守だつて、じやああとにしてさあさあ集まつて下さい、勸進帳もどきで讀み上げるから」、何でも芝居掛りになるのはいつもの癖でした。

篤次郎は芝居掛りでどのように「舞姫」を読んだのであろう。当

Osaka Shoin Women's University Repository

時において漢字の読み方は一定していたのだろうか。それとも篤次郎が鷗外流の読み方を心得ていたのだろうか。あるいは読み手の感興や好みによって自由に読まれたのではないか、とも想像できる。

「舞姫」の文体について「雅文体」を強調したのは、日夏耿之介「永遠の雅文小説」（「鷗外文学」実業之日本社、昭19・1）であった。その「雅文小説」というのは「古色蒼然たる雅語古語癈語を用ゐた雅文體」で独特の「ニュアンスとトオンとがある清新體であつた」とされ、「鷗外の雅文は、原來近世國文の美文調が骨子で、その間に、極く選擇を施された、洗練された、美しいひびきを有つ漢語が、赤銅細工のなかの黄金のやうに、燦然とかがやいてゐた」と記されている。ここで説かれた「雅語古語癈語」とは具体的にどのような言葉なのか、また「美しいひびきを有つ漢語」とはどのような読み方なのだろうか。「舞姫」の文体形式は「雅文体」とみなされたが、雅文というのは結局、漢字の読み方によって規定されたところが大きいのではないだろうか。言いかえると、「舞姫」の漢字を「雅語古語廢語」などに随意に読むことで、その語彙的構成によって「雅文体」と称したのではないかと思われる。ちなみに、「舞姫」文中の漢字で、「梯」＜きざはし＞・「木欄」＜おばしま＞・「鈴索」＜すずなは＞・「觸れば」＜さやれば＞・「目」＜まみ＞などの読み方は雅語の例だが、これに対して「梯」＜はしご＞・「木欄」＜てすり＞・「鈴索」＜れいさく＞・「觸れば」＜ふるれば＞・「目」＜め＞などの読み方をすると雅語ではなくなるだろう。意図的に俚語としての読み方を試みた場合、「舞姫」の文体はなお「雅文体」として認められるだろうか。

ところで、日夏耿之介によって「舞姫」の文体が「雅文体」と規定されたことで、「舞姫」の漢字は意識的に雅語（和語）として読まれる傾向が強くなったようである。そもそも、改造社版「森鷗外集」（昭3・1）収録の「舞姫」は、漢字の読み方に雅語（和語）の例が多く、全般に「雅文体」を想起させるものであった。「舞姫」が「雅文小説」として意識されたのはこの改造社版「森鷗外集」の振り仮名の影響があったのではないだろうか。

「舞姫」における漢字の読み方は、未だ確定し難い部分もあるが、「舞姫」の文体を考える上でも看過できない問題であると思われる。

註

1　ルビを振った担当者は直接には誰かわからない（あるいは編者の与謝野寛とも考えられるだろう）が、永井荷風の「鷗外全集刊行の記」をみると、この全集全十八巻の編集および印刷校正が各部門の専門的知識人によって担当され殊に鷗外が漢字の使用に厳格であったため鷗外の用語例に通暁していたといわれる小島政二郎がその校正面で活躍したらしい。それにしても「頬髭」＜ほほしげ＞・「凌ぎ玉へ」＜ひのぎたまへ＞などの漢字の発音に方言が入っているのは、校訂者の読みぐせなのであろう

Osaka Shoin Women's University Repository

か。

2 筆者の判断により重要と思われる文献を挙げた。なおA～Oの文献以外に次のような文献を参照した。

「森鷗外作品集」第一巻　昭和二五年一二月　創元社刊
「現代日本小説大系」第一巻　昭和二六年一月　河出書房刊
「森鷗外小説集」昭和二九年一二月　春歩堂刊
「人と作品現代文学講座」明治編Ⅱ　昭和三五年一一月　明治書院刊
「鑑賞と研究現代日本文学講座」小説1　昭和三七年五月　三省堂刊
「鷗外選集」第一巻　昭和五三年一一月　岩波書店刊

以上は抄出のものも含めて振り仮名のある文献で比較的よみ方が後に影響を及ぼさないものであった。なお、これらの文献以外で「三代名作全集森鷗外集」(河出書房、昭17・3)・『鷗外選集』第二巻「舞姫」(東京堂、昭24・8)・「森鷗外集」上巻(新潮社、昭25・12)・『明治文学全集』二七巻「森鷗外集」(筑摩書房、昭40・2)などはルビが振られていなかった。

3 筑摩書房発行『森鷗外全集』第一巻は、昭和三四年三月初版のほか昭和四〇年四月初版第一刷としたものがあるが紙型は同じと思われる。

4 「現代国語3改訂版」・「新版現代国語3」などは高等学校用テキスト、「近代文学選」は主に大学講義用テキストである。高等学校用テキストはこれらの他にも出来る限り多数を参照し、ある程度の傾向を見ることが出来たが、煩雑になるので省略した。大学用テキストとしては「原典による日本文学史・近代」(桜楓社、昭42・5)・「校注近代名作選」(学友社、昭42・9)などを参照したが振り仮名はほとんど振られていなかった。

5 「舞姫」の底本の状況については、拙稿「森鷗外『舞姫』異本考―縮刷本『美奈和集』の位置づけのために―」(「樟蔭国文学」、昭55・12)において調査を行っている。

6 「縮刷水沫集」(春陽堂、大正5・8)を底本として「舞姫」本文を全部で六十九の分節に区切った。なお、参照した諸本「草稿」「国民之友」「国民小説」「美奈和集」「改訂水沫集」「塵泥」は、それぞれ(草)(国友)(国小)(美)(改水)(塵)と略記した。

7 「尋常」〈よのつね〉の振り仮名は「即興詩人」に用例がある。その振り仮名〈よのつね〉は(草)(国友)(国小)における〈世の常〉という読み方と同じであるから、「房」を〈カビン〉と読むことも可能なのではなかろうか。

8 「うたかたの記」は「志がらみ草紙」(明23・8)初出を、「文づかひ」は「新著百種」(明24・1)初出を、「即興詩人」は「志がらみ草紙」三八号(明25・11)から「めさまし草」四九号(明34・2)まで計三十八回にわたり分載された初出のもの及び春陽堂発行(明35・9)の「即興詩人上・下」初版本を参照した。「即興詩人」の初出と初版本との間には、かなり異同があるようである。なお、参照した諸本はそれぞれ、「うたかたの記」は(空)(鷗外自身「空像記」と表記している)、「文づかひ」は(文)、「即興詩人」は(即)と略記した。

Osaka Shoin Women's University Repository

9 「鈴索」〈すずなは〉の振り仮名は「太陽」（明30・6）収録の「理木」に用例があるが、「太陽」収録の全作品が総ルビとなっているので鷗外自身の振り仮名かどうか判断しかねる。「鈴索」は「即興詩人」でルビが振られていなかったので、そのまま音よみにする方が望ましいとも思われる。

10 〈あきうど〉の振り仮名のついた漢字は「即興詩人」に「賈人」の用例がある。

11 「汗衫」〈じゆばん〉・〈はだぎ〉二通りの振り仮名の用例が「即興詩人」にある。

12 〈キュウ〉の振り仮名のついた漢字は「即興詩人」に「撞杖」の用例がある。

13 「即興詩人」に「房奴」〈カメリエリ〉の用例があり、「房奴」も〈ぼうど〉と読むよりは〈ボオイ〉とよむ可能性が強い。

14 「房」は、「草稿」「国民之友」「国民小説」では「カビン」と表記されていた。これはドイツ語のよみ方ではないから他の例もドイツ語よみしなければならないという原則はないようである。

（本学助手）

〔追記〕

本稿は、現在、本学国文学科嘉部嘉隆教授と共同して研究をすすめている「諸説集成　鷗外『舞姫』詳註」（近刊予定）の作成の作業を通じて浮かび上がったルビの諸問題についてまとめたものである。本編の一部分は、嘉部嘉隆教授の論文「三たび諸家の鷗外論に対するいささかの疑念」（『森鷗外―初期文芸評論の論理と方法』桜楓社〈昭55・9〉所載）と重複しているが、如上の理由によっている。